

参考図書紹介

- 『開かれた学びへの出発 ―21世紀の学校の役割―』
(市川著、金子書房、1998年)
- 『勉強法が変わる本―心理学からのアドバイス―』
(市川著、岩波ジュニア新書、2000年)
- 『学力低下論争』
(市川著、ちくま新書、2002年)
- 『学力から人間力へ』
(市川編著、教育出版、2003年)
- 『学ぶ意欲とスキルを育てる 一いま求められる学力向上策―』
(市川著、小学館、2004年)
- 『「教えて考えさせる授業」を創る』
(市川著、図書文化、2008年)

図11

まとめと閉会挨拶

今井 康雄

(東京大学教育学部附属中等教育学校校長・
基礎教育学コース)

今日は最初のシンポジウム、成果発表でしたが、非常に充実した報告を聞きましたし、討論も、なかなか批判的なやり取りもあって大変興味深く聞きました。

附属中等教育学校をフィールドとして、12のプロジェクトがいよいよ走り始めたところです。そして、附属をフィールドとするプロジェクトの13番目のものとして、附属独自のプロジェクトを立ててこのイノベーション科研に参加してもいます。話を聞くと、このようなものは附属中等教育学校にとっては画期的というか、一昔前では考えられなかったような学部と附属との連携のあり方だということです。私は校長になってまだ2年目なので、昔の話を聞くだけですが、国立の附属学校としては、研究のフィールド、あるいは研究に貢献する場となることは、附属学校本来のあり方であって大変ありがたい話だと思っています。特にカリキュラム・イノベーションがテーマですので、教科の見直し、教科というものを一体どう考えるか、考え直すかという附属自身の取り組みとも深くかかわってきます。

先ほども紹介がありましたが、附属中等教育学

校は、伝統的に総合学習を重視しています。つまり、教科を超えた学習、探究的な学習をもとに行ってきたということもあり、カリキュラム・イノベーションの科研に適合したフィールドではないかと、その点では自負を持っています。ある意味でこの科研を先取りをしたカリキュラムをわれわれは実現してきたのではないかと考えています。

同時に、今日いろいろお話を聞いていると、このカリキュラム・イノベーションの科研は非常に幅が広く、多面的で、視点も多様です。これを一体どうやってまとめていくのか、3年後にどうまとまるのか、ある意味で不安で、また楽しみでもあります。そうすると、ひょっとすると、附属がフィールドであるということが、このカリキュラム・イノベーション科研の一つの扇の要になるかもしれないという感じもしています。これは附属の役割がますます大きくなるのではないかとこの感じがしています。

それから、一つだけ私なりの印象を申し上げますと、社会に生きる学力形成は、先ほど金森さんの批判的なコメントにもありましたが、単に今、社会に何が求められていて、それをどう教育で実現するかということだけにとどまりません。もちろんそれはあるわけですが、そのことを学校あるいは教育の場で考え直すことには、同時に、生きるに値する社会とは何かということを考え直す、あるいは、教育に値する、教えるに値する知とは一体何なのかということをもう一度考え直すという側面が含まれています。つまり、社会と学力、あるいは学校との相互リンクには、単に肯定的なものではなく、批判的な関係もあり得るのではないかと思います。

私は教育哲学をフィールドとしているので、「教育哲学概説」などという講義をすると、例えば教育思想の出発点の一つとしてプラトンのテキストなどを素人なりに読みます。知とは何か、人間とは何か、真理とは何かといった哲学的な大問題が議論の対象になりますが、それをいかに教えるか、

知をいかに教えるか、あるいは教えるに値する知は何かというところから出発して、知とは何かということがそこでは問われることになります。ですから、哲学的思考の出発点から眺め直してみると、何を教えるか、いかに教えるかを考えるということは、実は、知とは何か、あるいは生きるに値する社会とは何かということを考え直すことと不可分なのではないかと思います。まさにそれがイノベーション的・革新的であるということだと思います。そういう視点を持った形で今後3年間展開していけたら、そしてそこに附属が貢献していけたらと思っています。